

折に触れ 四字熟語

NO. 179 『牛刀割鶏』 ぎゅうとう かつけい

< 意味 > 取るに足りない小さなことを処理するのに、大げさな方法を用いるたとえ。小さな物事を裁くのに、大人物や大げさな方法・手段などは必要ないということ。また、それらを戒めた語。鶏をさばくのに牛を切る大きな包丁を用いる意から。「割鶏牛刀」ともいう。

< 出典 > 「論語」<陽貨>

子之武城、聞絃歌之声。夫子莞爾而笑曰、割雞焉用牛刀。子游対曰、昔者偃也、聞諸夫子。曰、君子学道、則愛人、小人学道、則易使也。子曰、二三子、偃之言是也、前言戲之耳。

読み下し： 子、武城に之きて、絃歌の声を聞く。夫子莞爾として笑いて曰く、「鶏を割くにいづくんぞ牛刀を用いん」。子游対えて曰く、「むかし偃やこれを夫子に聞けり。曰く、“君子道を学べば人を愛し、小人道を学べば使い易し”と」。子曰く、二三子よ、偃の言是なり。前言はこれに戯れしのみ」。

通 釈： 子游が治めている武城の町中にさしかかると、あちこちから音楽がきこえてくるのではないか。孔子は思わずニコリした。「鶏を料理するのに牛刀を持ちだしたようなものだね」子游はすぐさま反駁した。「ですが先生、わたしは以前、先生からこう教えを受けました。“君子が道の体得をめざして勉強すれば、人間愛にめざめる。小人が道をめざして勉強すれば、上に対して従順な人間になる”と」真顔でそういう子游を見やりながら孔子は言った。「諸君、偃（子游）の言うとおりに。さっきのは冗談だよ」

用 例： これは少し牛刀鶏を割く嫌いがある。<森鷗外・独身>

一 言： 令和3年、丑年に因んで「牛」の付く四字熟語の三弾目です。

参照文献： 徳間書店「論語」 岩波書店「四字熟語辞典」